

横浜ドイツ人学校におけるドイツ語の方言接触

—綴り<r>における発音変異の分析—

金田懐子(東京大学大学院生)

1. はじめに

本論文は日本におけるドイツ語の方言接触とスピーチ・アコモデーションに関する予備調査の結果を報告するものである。2018年現在、約15,000人のドイツ語話者が日本に滞在しており(法務省, 2018), ドイツ語話者を配偶者に持つ家庭と共に在日ドイツ語話者人口を構成していると考えられる。横浜ドイツ人学校には2019年現在、小学生から高校生まで約500人の児童・生徒が在籍しドイツ語話者コミュニティを形成している。当該コミュニティに関する先行研究は乏しく、生徒2名の日独コードスイッチングに関する研究(今村, 2013)はあるものの、ドイツ語の方言には言及していない。ドイツ語圏は独・墺・スイス各国の標準ドイツ語および多種多様な地域方言が存在することで知られるため、各地からもたらされた変種が接触した結果どのようなドイツ語が日本のドイツ人学校で使用されているか、という観点からの言語学的調査を行うことは方言接触の分野に新たな事例を提供するものと考えられる。本論文では、ドイツ語の諸方言および各国の標準語の概説をふまえてコミュニティの方言背景を整理したのち、日本のドイツ人学校で観察された発音の変異を分析していく。

2. 分析の枠組み

以下を分析の理論的枠組みとして採用する。まず Giles *et al.* (1987) の提唱する「スピーチ・アコモデーション理論 (speech accommodation theory)」である。これは話者が相手によって話し方を無意識的に、あるいは意識的に調整する習性を類型化したものであり、相手に受け入れられるために相手の話し方へ近づけようと適応する行為を「収斂 (convergence)」, 逆に相手との距離を示すために相手の話し方との違いを大きくする行為を「拡散 (divergence)」と呼ぶ。こうしたアコモデーション行為は継続する期間によって異なる結果をもたらすことが指摘されている。相手の話し方に近づけようとする「短期間のアコモデーション行為 (short-term accommodation)」は一時的な適応・調整であるが、それが長期間に渡ると (long-term accommodation) 話者自身の話し方が永続的に変化・定着する可能性がある (Britain, 2018)。

また、第二方言習得には話者の社会的ネットワークの特性が関係する。Kerswill & Williams (2000) は英国のニュータウンでみられた子どもの言語使用の研究から、年齢が上がるほど、また社会的で友達どうしのグループによく溶け込んでいる子どもほど親と異なる言語使用を身につける、つまり子どもの話し方は成長とともに友達からの影響を強く受けるようになることを示している。

3. ドイツ語の諸方言・各国の標準語

ドイツ語圏の諸方言は国境を超えて連続しており、図1のようにドイツ北部の「低地ドイツ語諸方言 (Low German dialects)」, ドイツ中部の「中部ドイツ語諸方言 (Middle German dialects)」とドイツ南部・墺・スイスの「上部ドイツ語諸方言 (Upper German dialects)」に細分化される (Knöbl, 2011)。一方、独・墺・スイス各国において各々の「標準語」とされるドイツ語変種が確立しているとされる (高橋, 2009)。

4. 予備調査の概要

予備調査ではドイツ人学校において10~17歳の生徒20名(男性12名, 女性8名)より①出身地や家族・交友関係などの話者情報, ②単語の読み上げ(50語), ③ピクチャータスク(17語), ④談話データを収集した。調査は校内で標準ドイツ語を用いて生徒と一対一でのインタビュー形式で実施した。



図1 ドイツ語圏の方言区分 (河崎 2008:36を改編)

本論文では収集したデータのうち話者情報と<r>の発音変異(31 語, 計 658 トークン)に対象を絞り, 定量的・定性的に分析していく。

5. 分析

5.1 在日ドイツ語話者コミュニティの方言背景

まず, どのようなドイツ語の方言が日本のドイツ人学校へもたらされたかを探る。図2は調査対象の生徒およびその両親の出身地を3節で示した方言区分(図1)に基づいて整理したものである。ここから, ①日本生まれの生徒(8名)と日本人を母親として持つ生徒(11名)が半数前後を占めること, ②ドイツ南部・奥・スイスなどの上部ドイツ語諸方言地域出身者である生徒(8名)と父親(12名)がおおよそ半数を占めることが示された。

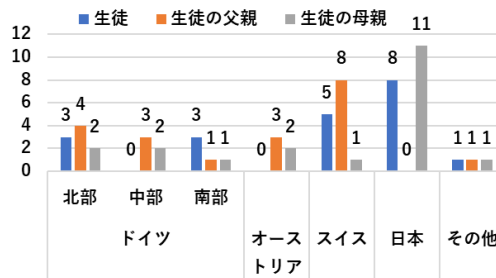


図2 生徒とその両親の出身地

現代ドイツ語の標準発音を定めた辞典 Duden Das Aussprachewörterbuch(2000)には, <r>の発音として有声口蓋垂摩擦音 [ʀ]・有声口蓋垂ふるえ音 [r]・歯茎ふるえ音 [r̥]・歯茎はじき音 [r̥̥] が挙げられており, メディアでは口蓋垂摩擦音での発音が優勢だが明瞭に強調する場合には歯茎・口蓋垂ふるえ音の使用率が増える, といった説明がなされている。今日の標準ドイツ語ではしばしば口蓋垂音が一般的とされるが, 第二次世界大戦前から戦後への比較的短期間で標準発音が歯茎ふるえ音から口蓋垂音に移行したこと, 方言においてはあらゆる<r>の変異形がみられること(Wiese, 2001), またドイツとオーストリアでは口蓋垂ふるえ音と歯茎ふるえ音(舌先ふるえ音)が広まっている一方スイスでは歯茎ふるえ音が優勢であることが指摘されている(Hirschfeld & Siebenhaar, 2014)。そしてドイツ語圏各国の<r>の発音についてドイツの標準形は「口蓋垂ふるえ音と語末の母音化」, オーストリアの標準形は「歯茎ふるえ音と語末の母音化」, スイスの標準形は「あらゆる言語環境における歯茎ふるえ音」が特徴とされる(Hirschfeld & Siebenhaar 2014: 123)。まとめると, ドイツ語の<r>の発音は①様々なヴァリエーションが存在するが, どの変異形が選択されやすいかは言語環境によって傾向が異なる, ②口蓋垂音と歯茎ふるえ音はどちらも標準発音とされるがドイツでは比較的新しい標準形である口蓋垂音への移行が進みつつある, ③奥・スイスでの標準形は歯茎ふるえ音であり, スイスでは音節末の母音化が見られない, といった特徴をもつ。このような特徴は日本のドイツ人学校へ通う生徒の間でも見られるのか, 音節頭・音節末のそれぞれの言語環境について分析を行う¹⁾。

5.2 言語環境の比較

表1, 表2は綴り<r>を含む単語の読み上げ結果を音節頭と音節末に分けて示したものである。標準形とされる口蓋垂音の使用は音節頭では72.8%と優勢であった一方音節末ではまったく見られず, 9割が母音化している。母音化しなかった例については全て歯茎音であった。つまり生徒の発音は①言語環境によって選択される変異形が大きく異なり, また②ドイツの標準形とされる口蓋垂音の影響を強く受けていることが明らかになった。これは先行研究で見られた傾向と概ね一致する。一方で, 生徒やその父親の出身地として割合の高い上部ドイツ語方言地域の変異形の影響は少ない。生徒は友人の話し方へのアコモデーション行為あるいは校内という公の場でのインタビューであることから一時的に標準形を使用したのか, それとも既に出身地の変異形が口蓋垂音に移行しており口蓋垂音を第一方言として習得していたのか, 検討が必要である。

表1 <r>の使用数(音節頭) (%)

[ʀ]	[r]	[e]
203 (72.8%)	67 (24.0%)	9 (3.2%)

表2 <r>の使用数(音節末) (%)

[r]	[e]
35 (9.2%)	344 (90.8%)

5.3 単語間のゆれ

表3・4に単語ごとの<r>の使用数を音節頭と音節末に分けて示した。音節頭はいずれも口蓋垂音優勢ではあるものの *Rabel*(カラス)と *ratsam*(賢明な)の二単語で歯茎ふるえ音 [r̥] の使用比率がそれぞれ40%, 35%とやや高めである。この二単語は<r>が語頭かつ長母音[a:]が後続する点が共通しているため, この言語環境が子音の調音位置に影響している可能性がある。また *durchführen*(実行する)のみ突出して母音化の傾向がみられる。音節頭では *Regie*(演出), *Ware*(品物), *Unterrock*(ペチコート), *durchführen* 以外全ての単語が<r>を含む音節に強勢を持つが, 変異形の選択への影響は特にみられない。

音節末はいずれの単語もおおよそ9割が母音化, 1割が歯茎音で発音されるという傾向で一致している。 *Basiert*(*basieren*(基づく)の三人称単数現在形)のみ100%母音化している。母音化の割合の高かった *durchführen* 及び *basiert* は動詞の最終音節に<r>が含まれる点で共通しており, ドイツ語において動詞の語尾を曖昧に発音する傾向などと併せ検討する必要がある。

1 ドイツ語に一般的にみられる<r>の発音については口蓋垂音・歯茎音・母音という大まかな区分に関してはほぼ共通の見解がみられるものの, より詳細な区分(口蓋垂摩擦音/ふるえ音/接近音, 歯茎ふるえ音/はじき音, 弱化母音/半母音)に関しては先行研究によって採用される発音にゆれがみられる。したがって, 本論文においては子音/母音の対立と子音内の調音位置による口蓋垂音と歯茎音の対立のみに注目して分析を行った。詳細な区分は割愛し, それぞれ口蓋垂摩擦音 [ʀ], 歯茎ふるえ音 [r̥], 母音 [e] の項にまとめている。

表3 単語ごとの<r>の使用数(音節頭) (%)

	[ʁ]	[r]	[ʀ]
Rock (スカート)	15 (75%)	5 (25%)	0 (0%)
ruhig (静かな)	16 (80%)	3 (15%)	1 (5%)
Räte (助言)	14 (70%)	6 (30%)	0 (0%)
Rabe (カラス)	12 (60%)	8 (40%)	0 (0%)
römisch (ローマの)	16 (80%)	4 (20%)	0 (0%)
Regie (演出)	14 (73.7%)	5 (26.3%)	0 (0%)
richtig (正しい)	16 (80%)	4 (20%)	0 (0%)
Rücken (背中)	16 (80%)	4 (20%)	0 (0%)
ratsam (賢明な)	13 (65%)	7 (35%)	0 (0%)
Ware (品物)	15 (75%)	5 (25%)	0 (0%)
Unterrock (ペチコート)	16 (80%)	4 (20%)	0 (0%)
Garage (ガレージ)	15 (75%)	4 (20%)	1 (5%)
durchführen (実行する)	10 (50%)	3 (15%)	7 (35%)
unterrichten (教える)	15 (75%)	5 (25%)	0 (0%)

表4 単語ごとの<r>の使用数(音節末) (%)

	[r]	[ʀ]
abfahrt (出発する)	2 (10%)	18 (90%)
durchführen (実行する)	2 (10%)	18 (90%)
Kirche (教会)	2 (10%)	18 (90%)
hören (聞き耳を立てる)	2 (10%)	18 (90%)
Storch (コウノトリ)	2 (10%)	18 (90%)
antworten (答える)	2 (10%)	18 (90%)
wirksam (効果的な)	2 (10%)	18 (90%)
basiert (基づく)	0 (0%)	20 (100%)
durch (...を通して)	2 (10%)	18 (90%)
durchaus (まったく)	2 (10%)	18 (90%)
Fahrkarte (切符)	2 (10%)	18 (90%)
Fahrkarte (切符)	2 (10%)	18 (90%)
Basar (バザール)	1 (5%)	19 (95%)
Haar (髪の毛)	2 (10%)	18 (90%)
super (すごい)	2 (10%)	18 (90%)
Tiger (トラ)	2 (10.5%)	17 (89.5%)
Sänger (歌手)	2 (10%)	18 (90%)
Gefahr (危険)	2 (10%)	18 (90%)
Chemiker (化学者)	2 (10%)	18 (90%)

5.4 話者間・話者内・兄妹間のゆれ

表5・6は各生徒による実現形である²。音節頭で全てを口蓋垂音で発音した生徒は全員ドイツ語学習者を親に持つ(生徒Jは母親がカタール出身)。それ以外のドイツ語学習者を親に持つ生徒も、生徒A・Pが一単語以外を口蓋垂音で発音、逆に生徒T, O, H(生徒Hは父親がフランス出身)が全てを歯茎音で発音するなど、生徒Kを除き単語間のゆれが少ない。歯茎音がみられた生徒R, B, Qはドイツ南部出身であるが、*durchführen*の母音化は出身地域に関係なくみられた。またスイス出身者のうち生徒T・Kで興味深いふるまいがみられた。彼らの音節頭での歯茎音はスイスの発音の影響を受けたものと思いきや、音節末はスイスの特徴に逆らい母音化したのである。「音節頭での歯茎ふるえ音&音節末での母音化」はオーストリアの特徴とされるが、今回の調査ではオーストリア出身でそのような発音をする生徒はおらず、生徒T・Kに交友関係を尋ねても特にオーストリア出身者は挙がらなかった。彼らは親の話し方(すべての<r>を歯茎音で発音)を第一方言としながら、学校での教師や生徒の話し方(音節頭の<r>が口蓋垂音&音節末の<r>が母音化する標準ドイツ語)へのアコモデーション行為(convergence)が生じた結果その話し方を第二方言として習得している途中段階であると考えられる。

表5 単語リスト内の音節頭に<r>を含む単語と生徒の発音

生徒 年齢	A※ 10	S※ 11	T※ 11	J 12	O※ 13	P※ 13	E※ 13	R 13	B 14	C※ 14	D 14	F※ 14	O 14	H 14	G 15	I 15	N 15	M※ 16	K※ 16	L※ 17
Rock	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]
ruhig	[ʀ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]
Räte	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]
Rabe	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]
römisch	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]
Regie	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]
richtig	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]
Rücken	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]
ratsam	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]
Ware	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]
Unterrock	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]
Garage	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʀ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]
durchführen	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[r]	[ʀ]	[ʁ]	[ʀ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʀ]	[ʁ]	[ʀ]	[r]	[ʁ]	[ʀ]	[ʀ]	[ʁ]	[ʀ]	[ʁ]
unterrichten	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[ʁ]	[r]	[ʁ]

² 表中の※は日本語話者の母親をもつ生徒である。また性別はそれによる顕著な発音の差が見られなかったため明記していない。

表6 単語リスト内の音節末に<r>を含む単語と生徒の発音

生徒 年齢	A※ 10	S※ 11	T※ 11	J 12	O※ 13	P※ 13	E※ 13	R 13	B 14	C※ 14	D 14	F※ 14	O 14	H 14	G 15	I 15	N 15	M※ 16	K※ 16	L※ 17
音 節 末	abfahrt	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	durchführen	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	Kirche	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	horchen	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	Storch	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	antworten	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	wirksam	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	basiert	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	durch	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	durchaus	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	Fahrkarte	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	Fahrkarte	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	Basar	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	Haar	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	super	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
	Tiger	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	—	[e]	[e]
	Sänger	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
Gefahr	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	
Chemiker	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	[r]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]	

表5・6中に黄色と水色で示した2組の兄妹(生徒F・Tと生徒I・G)に着目すると、音節頭では兄妹間で発音の傾向に大きな差があるが音節末ではいずれも母音化で一致する。生徒T(妹)の発音がスイス出身の親の話し方の特徴を残すのに対し、生徒F(兄)が全てを標準形で発音したことは、Kerswill & Williams(2000)の指摘を示唆していると解釈できるだろう。

このような単語間・生徒間にみられる<r>の発音のゆれを話者自身はどのように捉えているのだろうか。インタビューでは多くの生徒が日常的に(学校で)標準ドイツ語を用いると回答した一方、調査の事前に校長先生はワードリスト中の単語の発音について「スイス出身の生徒が巻き舌になるくらいの違いしか見られないのではないか」という予想をしており、逆に言えば<r>、特に口蓋垂音と歯茎ふるえ音(巻き舌)の差異は少なくとも教師側には意識されていることが想像できる。

6. 結論

本論文は、日本在住のドイツ語話者がもたらした諸方言がドイツ人学校で接触し方言混交が生じる中、生徒のあいだで身近な友人たちの話し方に近づけるアコモデーション行為が生じている事例を提示した。生徒の<r>の発音は先行研究の傾向と概ね一致したものの、言語環境や単語の種類が発音に影響することが考えられる。また話者内や兄妹間での発音のゆれは、生徒の話し方が友人の影響で変容していることを示唆している。今後は談話データとのスタイル差の比較を行うとともに、在校生全体の出身地別人口内訳や教師に関する追加調査、話者の意識(perception)に関する実験などを行いたい。また、同一話者から再度データを収集し、実時間(real-time)における変化が観察されるか継続して調査考察していきたい。

参考文献

- Britain, D. (2018). Dialect contact and new dialect formation. In C. Boberg, J. Nerbonne and D. Watt (eds.), *Handbook of Dialectology*. Oxford: Wiley Blackwell. 143-158.
- Giles, H., Mulac, A., Bradac, J. J. and Johnson, P. (1987). Speech accommodation theory: The first decade and beyond. *Communication Yearbook*, 10(1), 13-48.
- Hirschfeld, U., & Siebenhaar, B. (2014). Aussprachevielfalt im Deutschen. *Germanistik in der Ukraine*, 9, 119-132.
- 今村圭介 (2013). 在日ドイツ人学校生徒の言語使用 日本語研究, 32, 131-144.
- 河崎靖 (2008). ドイツ方言学 ことばの日常に迫る 現代書館
- Kerswill, P., & Williams, A. (2000). Creating a new town koine: Children and language change in Milton Keynes. *Language in Society*, 29(1), 65-115.
- Knöbl, R. (2011). Aspects of pluricentric German. In A. Soares da Silva, A. Torres, M. Gonçalves (eds.), *Línguas Pluricêntricas: Variação Linguística e Dimensões Sociocognitivas*. Braga: Aletheia. 427-441.
- Mangold, M., 1922- Dudenredaktion (2000). *Duden: Aussprachewörterbuch: Wörterbuch der deutschen Standardausssprache*. Mannheim: Dudenverlag.
- 高橋秀彰 (2009). 標準ドイツ語の収束と分散—標準変種の確立と脱標準化に関する考察— 関西大学外国語教育研究, 17, 83-98.
- Wiese, R. (2001). The unity and variation of (German)/r/. In H. Van de Velde and R. van Hout, (eds.), *r-atics: Sociolinguistic, Phonetic and Phonological Characteristics of /r/*. Brussels: Etudes & Travaux. 11-26.